

氏名	石松日奈子
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第2498号
学位授与の日付	平成15年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	北魏仏教造像史の研究
学位論文審査委員	<u>主査・教授 佐藤 智水</u> <u>助教授 鐸木 道剛</u> <u>助教授 渡邊 佳成</u> <u>助教授 加治 敏之</u> <u>新潟県立近代美術館長 水野敬三郎</u>

学位論文内容の要旨

本論文は、中国の南北朝時代に出現した空前の造像供養流行の起点となった北魏仏教造像の特質を明らかにし、中国仏教造像史における位置づけを行ったもので、A4版の本文編と図版編の二冊構成となっている。内容は十本余りの既発表論文を基盤としながらも、研究課題に沿って新たに書きおこしたものである。

第1章（鮮卑拓跋部の発展と建国）では、北魏建国以前の鮮卑拓跋部の歴史を、文献資料と嘎仙洞等の鮮卑遺跡の調査によってたどり、大興安嶺から南遷する過程で狩猟・遊牧から定住へと生活様式を変え、徐々に漢文化を取り入れていった点を確認した。

第2章（鮮卑の風俗と祭祀）では、北魏仏教の特徴として挙げられる皇帝崇拝と二聖崇拝の淵源が、遊牧時代の鮮卑族が有していた英雄的大人崇拝及び母権制に根ざした聖母子崇拝に由来することを新たに指摘した。次に、北魏前期の祭天儀礼において、鮮卑式の西郊祭天に加え中国式の南郊祀が導入されて胡漢両式の祭天儀式が併存したことをとりあげ、それが孝文帝の代になって胡礼を廃し漢礼を用いる方向が示され、そのことによって祭祀や衣服の制が漢風に改革された点を確認した。さらに、北魏王朝で行われた皇帝・皇后や儲貳を立てる際の金人鍔トの旧習に注目し、これは鮮卑族の間に皇帝をイメージして造像するという風が存在したことを意味するとし、「皇帝の如き仏像」の造頭につながる要素として着目した。

第3章（五胡十六国時代の仏教造像）では、五胡諸民族のなかでとりわけ仏教化が遅かった鮮卑拓跋部において、造像技法の基盤となったのは、後趙、前秦、西秦、北涼など、他の政権下で発展した造像法であったとし、とくに河北の旧式なガンダーラ様式と涼州の新しい西域様式が北魏造像を形成するための重要な先行様式であったとの認識を示して、両地域の作例を挙げてその特色を明確にした。

第4章（北魏平城時代の仏教造像一）では、北魏前期仏教の特色として、徙民による仏教、皇帝崇拝、太武帝の廃仏、の三点を取りあげた。一つに、特に北魏建国期の河北からの徙民と、続く華北統一期の涼州からの徙民が平城造像の担い手となったとし、涼州式偏袒右肩像や交脚坐像、石窟造像など、新しい図像や造形法の出現に着目して、涼州造像の波及が平城造像を大きく発展させた点をより具体的に証明した。二つに、北魏王朝は鮮卑

以来の大人崇拜を皇帝崇拜へと発展させることにより、皇帝を頂点とする国家仏教体制を確立し、その仏教的基盤のもとに胡漢兩族を統率しようとしたことを述べた。三つに、446年の廃仏は、結果として復仏後の爆発的な造像熱を招き、北魏の国家仏教的方向を決定的なものとしたとし、また、廃仏によって仏教が都市部から一時的に消え、周辺部へ拡散し、地方造像や民間造像が活発になる端緒を開いたとした。

第5章（北魏平城時代の仏教造像二）では、まず仏教復興後の国家仏教体制の強化とそれに伴う皇帝崇拜の記念碑的造像を列挙した。次いで、仏教復興後の北魏では、仏教造像や墓葬において胡俗と漢文化と仏教が混在するダイナミックな造形が行われた時期があったことを指摘し、480年代以降に祭祀、宗廟制、服制、言語、通婚など、風俗全般にわたる改革が行われ、そのため造形上も「胡」を廃し「漢」を目指す風潮が生長し、その具体的事例として雲岡第6窟における中国式服制の仏像の出現を位置づけた。また、仏教復興期の中心人物であり涼州様式造像の導入者でもある沙門統の曇曜について、文献を検討しながら太和7年（483）頃に馮太后一派によって失脚させられた、とする新説を提示し、造像の「胡」から「漢」への変化の牽引者は曇曜ではないことを示唆した。さらに、北魏造像史上重要なキーポイントである雲岡石窟の分期問題に関して、第11～13窟の壁面に胡服供養者像を表す中小龕が多出する483年頃に注目し、このころに曇曜が失脚し、雲岡石窟の状況が大きく変化し、以後は雲岡が民間に開かれるようになったと論じた。その結果、造形上曇曜の関与が濃厚な第9・10窟は483年以前の造営であると結論し、また、中国式服制の造像が出現する第5・6窟についても、曇曜失脚後に雲岡石窟が民間に開かれたことによって、当時勢力を有していた宦官が皇帝と皇太后のために造営した可能性を提示した。

第6章（北魏洛陽時代の仏教造像）では、龍門石窟古陽洞の造営経過と造形上の特徴を明らかにし、仏龕を寄進した貴族から庶民、邑義など、さまざまな階層の人々が家族や祖先の追善を祈るなど、土俗的かつ現実的な目的が契機となっている点に注目し、石窟造像が修行や教化という本来の目的から遠ざかり、個別の供養行為の集積所的性格を帯びたことを指摘した。また、洛陽芸術の頂点と位置づけられる龍門寶陽洞や永寧寺址出土塑像の精妙かつ壮麗な造形を克明に検討し、洛陽遷都以降の北魏政権が胡族性を喪失し、上層部は貴族化して、華やかで中国化を窮め尽くした洛陽造像を生み出したとし、その影響は洛陽周辺ばかりでなく麦積山石窟へも及んでいることを、着衣形式の研究によって明らかにした。加えて、洛陽期の造像の特色は、華奢な体型や流麗な衣服の装、急増する造像題記など、線を主とする中国美術の伝統が顕著に現れた点にあることを示した。

第7章（北魏時代の地方造像と民間造像）において、5世紀半ばの廃仏が仏教の地方拡散と潜伏という状況をつくり、それと仏教復興後の国家公認の教化僧による造像活動によって、これが地方造像の隆盛に繋がったこと、また、地方や民間の造像の特徴として、雑多な信仰内容に対応する土俗的な表現や、石を材料とする素朴で力強い造形、中央造像にはない地域色を指摘した。

結論では、北魏造像の特質として、①国家主導の仏教体制、②徒民による造像、③皇帝崇拜と聖母子崇拜、④石窟造像の中国的展開、⑤仏教造像の中国化、⑥胡服供養者像の表現、⑦邑義の成立、⑧石彫造像の発達、⑨地方造像の展開、の9点を指摘した。そして、中国の仏教造像が十六国期以来の北朝造像の延長上に発展したことを強調すると共に、北朝時代の造像に見られる仏教図像、造像様式、信仰内容、造像形態などの特徴は、ほとんど北魏時代にその基礎が築かれていると結論し、近年活発な南朝起源説に対して、中国仏教造像史上における北魏造像の重要性を明確にした。

学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、2003年2月4日、学内審査委員4名・招聘審査委員1名によって行った。審査の結果は以下の通りである。

本論文は、北魏の仏教造像を、北魏国家と民衆の産物として時代性や民族性の中でとらえ、多くの実作品を証例として示しながら、その展開と独自性を明らかにした。従来の、ことに近年活発となった、漢民族国家の文化的優位性に基づく南朝起源論による解釈では北魏造像を理解しえないことを論じ、中国仏教造像発展の歴史における北魏造像の重要性を明確にした点で高く評価される。

北魏時代の石窟造像、単独の石像や金銅仏などの膨大な作例をすべて視野に入れ、豊富で色彩鮮やかなカラー図版を駆使しながら、個々の作例を北魏造像史の中に位置づけ、北魏時代の仏像の歴史を大観しているが、特に平城・洛陽など、いわば中央の造像のみにとどまらず、地方の造像、民間の造像に至るまで精力的に実地調査を行い、北魏造像の世俗化・土俗化の様相を明らかにし、その流れを生み出した背景として邑義の発達や石彫造像の流行を指摘し、そこに北魏造像の一特質を見出している。この点も、従来見過ごされていた面に照明を与えたものとして評価される。

各論中で最も注目されるのは、雲岡石窟における中期諸窟の編年に関する新説である。曇曜が483年頃に失脚したことを文献から推論し、胡服供養者像の出現状況を分析することにより、中期諸窟の年代について新たな説を提示した。曇曜失脚を契機に雲岡石窟が国家と皇帝のものから一般の僧や民間の信者に開かれた大衆窟に転換したこと、第5・6窟について、当時の有力者である宦官の王遇の寄進によって馮太后と孝文帝の二聖の為に造営されたものとするなど、さまざまな重要な指摘がなされ、今後の雲岡中期石窟研究に新たな展望を開いたといえる。第5・6窟で初めて現れる仏・菩薩等の新しい着衣形式についても、従来は皇帝の冕服着用に求めていたその出現理由に再考を迫るものである。加えて、これらの問題は、従来空白だった馮太后専権時代の北魏政治史にも大きな示唆を与えるもので、美術史研究と文献史学を近づけたという点でも高く評価される。

以上の積極的な評価が審査の基本であったが、次のような問題点の指摘もあった。

南朝造像の遺品が極めて乏しいため、実証的研究を旨とする本論文ではやむを得ないところであるが、中国式の着衣形式は北魏と南朝のいずれで生まれ、どのように他に影響を与えたのか、という問題について、現時点で実証しうる事実に基づきながらその解答への道を提示して欲しかった。また、今回の論文では、光背や台座などの莊嚴具にはほとんど触れられていなかったが、仏像が中国化した段階では莊嚴具に表された文様が仏像の表現と有機的な関連を持ち、仏体と共に一つの世界を表現するので、今後の課題として、このような莊嚴具の問題に迫ることが期待される。

その他、内容の細部や用語の使い方、注記の仕方等についても各審査委員の間で種々議論がなされたが、上記問題点を含め、指摘された点の多くは今後のさらなる展開を期待する意味を込めて提言されたものであり、北魏仏教造像の性格を明確にした本論文の研究成果を損なうものではないことをあらためて確認した。

審査委員会は、以上により、本論文を博士の学位論文として認定することにつき、全員一致で合意した。